

極東國際軍事裁判所

亞米利加合衆國其他

對

荒木貞夫其他

宣誓供述書

供述者 小林修治郎

自分機我國ニ行ハルル方式ニ從ヒ先ヅ別紙ノ通り宣誓ヲ爲シタル上次ノ
如ク供述致シマス。

小林修次郎口供書

私ハ小林修治郎住所ハ福井縣今立郡神明村北山、當四十八才デス。

昭和十九年(一九四四年)七月比島第十四方面軍參謀トシテ「マニラ」ニ赴任シ同年末右方面軍隷下ノ振武集團編成セラル、ニ方リ此集團ニ配屬セラレ終戰マデ「マニラ」東方地域ニ於テ作戰ニ從事シテ居リマシタ任務ハ高級參謀トシテ主トシテ作戰及後方業務ノ統制デアリマシタ。私ノ着任シタ時ノ軍司令官ハ黒田中將デアリマシタ。昭和十九年(一九四四年)十月上旬山下大將ガ交代サレマシタ。武藤參謀長ハ昭和十九年(一九四四年)十月十八日米軍ガ「レイテ」ニ上陸ヲ開始シタ翌々日ノ十月二十日ニ着任サレマシタ。以下當時ノ實情ニ關シ陳述致シマス。一「マニラ」附近ノ作戰構想ト「マニラ」市ニ對スル方面軍司令官ノ意

圖ニ就キテ述ベマス。

1 密宋島ニ於ケル作戰ハ昭和十九年(一九四四年)十月以前ハ「リンガエン」及「バタンガス」兩正面特ニ其ノ海岸地域ニ於ケル決戰方針デアリマシタガ「レイテ」作戰ノ爲メ兵力甚シク不足スルニ至リ且ハ又其ノ經驗ヨリ見テ平地決戰ヲ不利ナリトシ改メテ山地ニ據ル特久作戰ヲ採ルコトナリ中南部「ルソン」島ニ於テハ此方面ノ軍險ノ主力ヲ以テ「マニラ」東方山地ヲ占領シ一部ヲ「バタンガス」州ニ配シ「マニラ」市ハ單ナル警備ト軍需品掩護ノ爲メ一部ハ陸軍

約二千五百人ヲ配置スルコトニ變リマシタ。

昭和二十二年十二月上旬デアリマス。

「マニラ」ヲ固守スルカ何ウカノ問題ハ重大ナ研究課題デアリマシタガ山下大將ハ之ヲ放棄スルニ決セラレタノデアリマス此問題ニ關シテハ參謀長、武藤中將ハ當初ヨリ放棄案ヲ力説シ山下大將ニ意見ヲ具申シテ居マシタ、其ノ理由トシテ

イ「マニラ」市住民一〇〇万ノ食糧補給困難ナルコト又戰災ニヨル住民ノ死傷ヲ避クルコト

ロ同市ハ木造家屋多ク火災類焼ノタメ比島文化ノ中心ヲ壊滅スルノ惧アルコト

ハ地下水ガ淺ク堅固ナル防空施設ガ出來ナイコト

ニ臨海ノ平地ニシテ之ヲ防備スルニハ多數ノ師團ヲ要シ現在ノ日本軍ニハ不可能ナルコト

ヲ擧ゲテ居マシタ。

但シ「マニラ」市及其周邊ハ南方軍全般ニ對スル軍需品集積サレ幾多ノ軍事施設ガアリ之ヲ短時間ニ撤去スルコトハ不可能ナルヲ以テ當初一部兵力ヲ配置シテ治安維持及軍需品ノ輸送搬出掩護ヲ行フコトニ決セラレタノデアリマス。昭和二十年一月上旬「マニラ」ニハ約三万中ノ軍需品ガ残ツテ居マシタ。

2 以上ノ方針ヲ遂行スル爲メ方面軍司令官ノ軍隊ヲ部署シタ外次ノ様

ナ處置ヲ採リマシタ。

イ比島政府ヲ十二月二十二日ニ「バギオ」ニ移轉セシム。

ロ軍司令部ヲ十二月二十六日「マツキンレー」兵營ヨリ「マニラ」東北方向約三十軒ノ「イボ」ヘ移轉シテ「マニラ」放棄ノ思想ヲ明ニシ以テ「マニラ」周邊ヨリ山地ヘノ移動ヲ躊躇シ遲延シテ居タ

軍隊及軍需品輸送ノ促進ニ努ム。

ハ十二月中旬以降特ニ命ジテ「マニラ」^一「モンタルバン」^一「マニラ」東北方向約二十軒山地入口ノ道以西ニ居ル軍隊ノ本部ヲ訪問シテ速

速ニ東方山地ヘ入ル様現地督促ヲ行ハシム。

ニ從來「マニラ」市中ニ在リテ警備ニ任シテ居マシタ「マニラ」防

衛司令部ヲ「マニラ」^一「モンタルバン」^一ヘ速ニ移動セシメ

兵團ノ名稱モ之ニ適スル如ク其ノ長ノ名ヲトツテ小林兵團トシ觀

念ヲ改メシム。

ホ昭和二十年一月上旬病ノ爲メ尙「マニラ」市内ニ駐マツテ居タ航

空軍司令官ノ下ニ幕僚ヲ派シ北部「ルソン」ヘノ移動ヲ促進セシ

ム。

ヘ「マニラ」^一「マツキンレー」^一兵營ト現ニ軍カ使用シテ居ル海岸附近ノ家屋ニ於テ防空及自衛上ノ輕易ナル工事ヲ認メ又三橋梁ハ「バタンガス」方面ヨリ北進スル敵ニ使用セシメナイ目的ヲ破

壞準備ヲスル外一切ノ家屋ハ戰爭ノメ使用ヲ禁止シ又住民ニ災害ヲ及ボスガ如キコト絶對無キ様トノ嚴重ナル指示ヲ下サレマシタ。

此點私ハ「マニラ」東方ニ殘置サレタ幕僚トシテ之カ徹底ヲ期シ一月中旬「モンタルパン」ニ於ケル隸下各兵團部隊參謀副官會同席上ニ於テモ確實ニ傳へ而シテ假令之カ爲メ戰鬥不利トナルモ尙方面軍司令官ノ意圖ヲ實行スル様附加説明シ一同諒解シテ歸リマシタ。尙振武集團長横山中將モ此點方面軍司令官ノ意圖ヲ重視シ一月上旬隸下一雜及將校全員ニ對スル訓示ノ中ニモ「マニラ」市ハ國際都デアリ其附近ニ作戰スル我軍ノ一舉一動ハ全世界環視ノ下ニアリ依ツテ特ニ軍紀ヲ嚴正ニシ後世ニモ笑ハレヌ立派ナ正シイ行動ヲ採ル様力説セラレマシタ。

ニ「マニラ」ノ戰況ニツイテ日本軍ノ實狀ヲ申述ベマス。

1 二月四日朝私ハ「マニラ」東北方二〇軒ノ「モンタルパン」デ次ノ狀況ヲ知リマシタ。

昨三日夕「マニラ」北北方ヨリ進入セル米軍ニ依リ全ク寄襲セラレ「バシツク」河以北ハ直チニ占領セラレタリ。敵ハ多數ノ戰車ヲ有スル自動車化部隊ナルモ兵力不明ナリ。

2 同日夜頃ニナリ更ニ「マニラ」東北方ニ壞走セリ、目下「マリキナ」河兩岸ハ混亂中ナリ。

3 其後各方面ノ狀報ヲ綜合スルニ

イ米軍ハ「ゲリラ」ノ誘導ニ依リ海岸ニ沿フ主要道ヲ避ケ我軍ノ配備ノ間隙ヲ縫ヒ「イボ」西側ヨリ「マニラ」東北側ニ進入セルコト

ロ我歩哨ノ前ヲ我將官旗ヲ立テタル「ゲリラ」ヲ乗セタル自動車通過シ其後方ヨリ突如米戰車續行シ「ゲリラ」多數「トラツク」ニ乗り同行セルコト。

ハ兵力ハ依然不明ニシテ判定シ得ス

ニ「マニラ」市中ニ宿營シ輸送其ノ他兵站業務ニ從事中等ノ殆ンド無武裝ニ近キ軍人軍屬ハ各所ニテ「ゲリラ」及敵意ヲ有スル「住民」ニ襲撃サレ慘殺サル、者多シ。

之ヲ要スルニ「マニラ」戰ノ當初ハ全クノ奇襲ニヨリ在「マニラ」ノ軍人及邦人ハ全ク混亂シ全ク統制ナク狀報又區々デアリマシタ。

4 此間「マニラ」東方山地ノ我々主力ノ方面ハ敵機ノ襲撃ニヨリ集積

軍需品ヲ燒カレ、交通ヲ遮斷サレ此間陣前マテ運ビ來タ食糧ソノ他

ヲ陣内ニ引入レ、道路ヤ陣地ヲ作ル等大アワテノ狀況デアリマシタ。

5 七日頃ニナリ「マニラ」ニ進入シタ米軍ハ大ナルモノニ非ラズ其主力

カハ「ゲソン」「サンフアンデルモンテ」ヘマニラ東北郊外ニア

ルコト。パコ驛ヘマニラ市内中央附近ニシテ我兵站軍需品倉庫多シ

ニテ彼我不規的ニ戰鬥ヲ開始シ又「マツキンレー」北側「バツツク」

河北岸ニハ敵軍進出シテ「マニラ」附近ノ部隊ト東方トノ交通連絡
 困難ナルコトヲ知り先ツ此窮境ヲ脱シテ「マリキナ」河附近ニ推進
 シツ、アリシ軍需品ヲ東方山地へ輸送シ又「マニラ」トノ連絡ヲ恢
 復セントシテ一部兵力ヲ以テ東方山地ヨリ出撃スルニ決シ命令サレ
 マシタガ何分軍隊ノ準備ガ間ニ合ハス特ニ初メカラ山デ防禦ノ頭ニ
 ナツテ居タ軍隊ヲ平地ニ出撃セシムルニハ大ナル苦心ガアリ遂二十
 四日朝ニ延ヒテ了ヒマシタ。
 又ソノ出撃行動モ敵ノ制空下テ火砲ヲ有セズ一般ニ活氣ヲ失ヒ行動
 緩慢トナリ食糧モ無クナリグズグズシテ居ル中方面軍司令部ヨリ速
 ニ「マニラ」市内ニ在ル軍隊ノ東方引上ヲ督促セラレマシタガ「マ
 ニラ」市トノ連絡ハ成功セヌマ、ニ二十一日出撃部隊ハ原位置ニ引
 上ゲマシタ。ソコデ「マニラ」市中ノ部隊へ主トシテ海軍へハ敵ノ
 タメ包圍セラレ脱出困難トナリ爾後數次ノ電命ト「マリキナ」河渡
 河ノ爲メノ船及其ノ收容掩護ノ爲メ派遣セル一部兵力モ無駄トナリ
 「全ク包圍サレ晝夜四周ヲ照明サレ一人ト雖モ脱出不可能ナリ」ト
 ノ報告ヲウケマシタ。
 但シ此間「マニラ」市中ニアツタ陸軍部隊中隊長以下一小隊ハ夜
 暗ヲ利用シ脱出シテ歸ツタ例モアリ「マツキンレー」附近ニ居タ海
 軍部隊ハ十五日頃ヨリ東方へ後退シテ居マス。
 之ヲ要スルニ「マニラ」ノ軍隊ハ全ク奇襲サレテノ混亂ヨリ始マリ

三

多數ノ「ゲリラ」ノ活動避難民ノ狼狽未タ市内ニ無武装テ殘ツテ居
 タ兵站部隊病院等ノ混雜、更ニ陸戰ニ不馴ノ海軍部隊ノ不規戰爭終
 始混亂ニ終始シタ狀況デアリマス。
 此間振武集團司令部ハ「モンタルパン」山中ニアリ各種情報入手ニ
 努メタルモ山中ノ通信及監視網モ未ダ不備ニシテ確タル狀報不明ニ
 月十八日頃ニ至リ次第ニ戰況概要ヲ明ニスルヲ得タノデアリマスガ
 市内ノ詳シイ狀況ハ依然明カナラス當方ヨリ派遣シタ連絡者モ遂ニ
 歸ラヌ者モアリマシタ。

「バタンガス」州方面ノ狀況ニ付テ申述べマス。
 此方面ハ舊第八師團ガ居リマシタガ師團長以下「マニラ」東方ヘ十二
 月末移動シ跡ヲ一大佐ガ指揮シテ居マシタ「ラグナー」湖ニヨリ主力
 方面ト分斷サレ連絡モ困難デアリマシタノデ無線ニヨル報告ノミニヨ
 リ該方面ノ狀況ヲ知ツテ居タ次第デアリマス。
 此方面ハ從來ヨリ相當「ゲリラ」モ活潑デアリ我ガ兵力減少ノタメ更
 ニ其ノ度ヲ加ヘタモノノ模様デ無線ノ報告ニヨリマス「米比軍」及
 「優勢ナル敵及ゲリラ」部隊トノ戰鬥ニ非常ニ苦境ニ在ルコトヲ想像
 スルコトハ出來マシタガ詳細ハ固ヨリ判リマセンデシタ。作戰地域ノ
 關係上獨立支隊トシテ行動シ振武司令部カラハ戰鬥間余リ命令ハ下シ
 得マセンデシタ。此方面ノ軍隊ノ任務ハ「バタンガス」附近ノ既設陣
 地ニ據リ敵ノ上陸及前進防害ニ勉メ爾後「ラグナー」湖南岸高地ヲ占

領シ集團主力ノ左側背ヲ掩護セヨト命ゼラレテ居マシタ。

四

比島住民ニ對シ探レル方面軍司令官ノ處置ニ就イテ述ベマス。

1 山下大將ハ特ニ軍紀問題ニ關シ嚴シイ方デアリマシテ住民ニ迷惑ヲ掛ケヌ點デハ内地ヨリ増派サレテ來ル軍隊及今迄町々ニ駐中シテ居ツタ軍隊ガ作戰ノ爲移動スル場合モ民間所有ノ家屋使用ヲ極力制限ヘ殆ンド禁止シ軍隊ハ露營ヲ本則トスベク命ゼラレ又私共現地派遣ニ方リテモ此點ヲ常ニ確メマシタ又自ラ範ヲ示シ「マニラ」赴任以來兵營其他之ニ類スル家ヲ用ヒテ居マシタ。

2 又住民ノ食糧器具等ノ使用ニ方リテモ賃金ヲ支拂ヒ已ムヲ得サルトキハ代リノ證書ヲ與ヘ且其ノ同意ヲ得ルコトヲ一般ニ要求セラレ之ガ爲メ「マニラ」東方山地内ノ作戰デ昭和二十年五月食糧全ク缺乏シタ際ニ於テモ振武集團長ハ部下軍隊ニ對シ會報ヲ以テ方面軍司令官ノ指示實行ヲ命シ軍隊指揮官モ之ヲ更ニ部下ニ命令シテ居ルモノヲ見マシタ。

3 又ゲリラニ對スル肅正討伐ニハ全軍ニ對シ情報ヲ周密ニシ「ゲリラ」ト良民ノ區別ヲ嚴選シ誤ツテ良民ヲ敵トスルカ如キコトノ絶無ヲ期スベキヲ訓示シテ居マス之カ爲メ特ニ討伐目標トシテ「武裝セルゲリラ」ト明示サレマシタ。

4 住民ノ戰禍避難要領特ニ「マニラ」市民ノ避難要領ヲ書面ニ作成シテ避難ニ當リ我カ軍ト混淆セシメヌ様其ノ避難經路ニ關シテモ準備

セシメ又「マニラ」市ニハ從來市民ノ世話ニ馴レタル「マニラ」防衛司令部ノ幕僚ヲ殘置シテ我軍隊トノ誤解錯誤ヲ起サヌ様着意シマシタ。

兵俘虜及敵國抑留者ニ對スル取扱ニ就キテノ指導ガ何ウデアツタカラ述ベベマス。

1 昭和十九年十二月中旬米軍ノ「ルソン」進攻ノ情勢明トナルヤ關係兵團ニ對シ米軍來ラバ平和裡ニ之ヲ引渡スベキコト及其際少クモ一ケ月分ノ食糧ヲ携行セシムル件、及匪團ニ對シ護衛スヘキコトニツキキ指示ガアリマシタ。振武集團ハ右指示ニ基キ在「マニラ」「サント、トーマス」ノ約四千名及「ロスバニオス」ノ三千名ヲ引渡シタノデアリマス。

2 「マニラ」ノ引渡シ。

二月三日夕「マニラ」市ガ米比軍ニヨリ全ク奇襲セラレ同收容所ガ米軍戰車隊ニヨリ包圍サレマスヤ所長林中佐ハ不慮ノ戰火ガ收容者ノ居ル家屋ニ及ブラ避ケル爲メ部下ノ職員(三十名前後ト記憶ス)ヲ其ノ本部ニ集メ而シテ米軍ト交渉セシ所米軍ハ收容者一同ノ引渡ニハ應スルモ日本軍ハ全部武装解除セヨト申出ヅ。所長ハ我主任務ハ收容者ノ安全引渡ニテ終ルモ尙日本軍人トシテ直チニ降服スルニ忍ビズ少クモ個人武装ヲ以テ友軍陣地ヘ移動スルカ已ムヲ得ザレバ此處ニテ全員戰死セントノ意ヲ傳ヘ數次交渉セル結果又收容者代表

ガ米軍ニ「此等日本人ハヨク面倒ヲ見呉レタリ」トノ助言ヲナシタル爲メ米軍ハ日本軍ノ申出ニ應スル件、今ヨリ直チニ安全地帯マデ誘導スベキ件ヲ回答シテ來マシタ。依ツテ收容長ハ部下數十名ニ命シ武装ヲ完備シ舍内ヲ整頓シ人員ヲ點呼シ收容者ニモ別レテ告ケテ出發ス。

或ハ門外ニ出デテ米軍ノダマシ打ニ遭フヤモ知レズト考慮シテ何時ニテモ戰鬥ニ應シ得ル如ク態勢ヲ整へ前進セリ。然ルニ案内誘導ニ立テル米軍大佐ハ極メテ紳士的（日本ノ武士道的）ニシテ日本軍ハ道路兩側ニ寄り歩キ一般米軍ノ誤解ヲウケサルコトヲ注意シ自ラ先頭ニ立チ安全平和裡ニ米軍配置外ニ導キ握手シ所長又彼ノ好意ニ感謝シ相互ノ健康ヲ祝シテ相別レタリト。右ハ收容所長自ラ歸來シテノ報告デアリマス。

3 「ロスバニオス」ノ引渡シ。

此方面ハ振武集團司令部ト距離ガ離レ一寸連絡ガ困難デ一時誤解ガアツタモノカ一月中旬頃所長ハ無斷收容者ヲ開放シ自ラ安全地域ニ退カシトシマシタノデ軍司令官ハ方面軍ノ意圖ニ從ヒ米軍來ル迄安全ニ保護シ且食糧ヲ給スベキヲ命シ再ビ同一場所ニ收容シ後日米軍來ルニ方リ「カランバ」ニ軍便ヲ派シテ米軍ニ引渡スベキヲ申出デ結局「ロスバニオス」ニテ開放シテ目的ヲ達成セシメマシタ。

4 米軍俘虜ノ内地輸送。

俘虜ノ内地輸送ハ陸軍大臣ノ命ニ依ルモノニシテ、輸送ハ大本營ノ配船ニ從フモノデアリマス。昭和十九年（一九四四）十月上旬俘虜ノ内地輸送ガ命ゼラレタノデ、カバナツアン收容所ノ健康者ヲマニラニ集結シテ待機シテ居リマシタガ、配船ガナク其ノマ、ニナツテキマシタ。然ルニレイテ作戰後米軍ハ逐次呂宋島ニ接近シテ來ルノデ、焦慮シテ居リマス。十二月十日頃日本婦人子供ノ歸國スル鴨綠丸ニ同船スルコト、ナリマニラヲ出發シマシタ。此ノマニラヨリノ輸送實施ハ十月上旬既ニ山下大將ノ前任者ニ依リ發セラレタ命令ニ基クモノデアリマシテ、山下大將以下司令部ハ鴨綠丸ガ米軍飛行隊ニ爆撃ヲ受ケタ後ニ此等ノ事情ヲ知ツタノデアリマス。

六 現地軍隊ノ實狀知得狀況ト通信連絡ノ實狀ニツキ申述ベマス。

作戰準備ガ整ハス特ニ無線裝備ノ不良及晝間米軍ノ徹底的制空、管内交通ガ敵及「ゲリラ」ニヨリ寸断セラレ、之ニ加フルニ何分「マニラ」附近ニテ作戰シタ軍隊ハ後方部隊、退院患者等ヲ加ヘテ急編成シ、更ニ又從來全ク復交渉ノ航空海軍地上部隊ガ急ニ加ハル等デ報告モ仲々思フ様ニ來ズ司令部トシテハ苦心シマシタ。

著シイ一例デハ「マニラ」市南側ニ二月四、五日頃既ニ有力ナ米軍ガ南方カラ進出シテ居マシタガ之ハ終戰後收容所ニ入ツテカラ米軍ノ雜誌デ知ツタ狀況デアリマス。

又「マニラ」「バタンガス」方面デノ不慮ノ事件ガアツタト云フコト
ハ全ク想像モ付カズ勿論之ニ類スル報告ハ一切受ケテモ居マセヌ。
從ツテ上司ヘノ報告ハ勿論致シタコトモアリマセン。

昭和二十二年（一九四七年）八月廿六日 於東京都國際軍事法廷建
物

供述者 小林 修次郎

右ハ營立會人ノ面前ニテ宣誓シ且ツ署名捺印シタルコトヲ證明シマス

同日於同所

立會人 岡 本 尚 一

宣
誓
書

フ
良心ニ從ヒ眞實ヲ述ベ何事ヲモ黙秘セズ又何事ヲモ附加セザルコトヲ誓

署名捺印

小
林
修
治
郎